

村上春樹はノーベル賞をとれるのか？

マッツ・カールソン

先日、このタイトルの川村湊の本に出会って驚いた。もちろんずいぶん前からこの問題について文壇で議論があることを知ってはいたが、一冊の本全体を要するほどまで重要極まりないとは想像もしていなかった。スウェーデン人であるため、時に日本のメディアにあなたの国で村上文学はどう見られているのかと尋ねられる。私はたいてい彼の本はファンの読者層の間で非常に人気が高いが、大学人や評論家の間では評価が分かれている、と答える。スウェーデンからの視点でこの問題について若干の考えを持っているので、この機会にそれを詳しく述べてみよう。

まったくの個人的興味から、私は村上の本のスウェーデン語訳が出るたびに大手とマイナーなスウェーデン新聞の書評欄をざっと読むことにしている。驚いたことに二〇一一年まで、個人的には凡作と思う『スプートニクの恋人』でさえ、ただの一本も否定的書評に出会わなかった。スウェーデンの書評者は全員、すべての新刊に圧倒的に好意的だった。ところが二〇一一年に何かが起こった。『1Q84』の出版と同時に多くの書評者は村上に背を向けたようだ。偶然だが同じとき、それまで彼の最大の応援者であった『ニューヨーク・タイムズ』でさえかなりきつい書評を出した。スウェーデンにもどると、『1Q84』が文学界のゲームの分かれ目になったかのようで、いわばそれが水門を開いたかのようになり、突如、村上作品に対する批判

が認められ、どっと流れ出した。しかし新聞は普通特定の著者に好意的な批評家に依頼するので、村上小説についても今も当然多くの良い書評に出会う。たとえばスウェーデンの地方紙『ウプサラ・ニーヤ・ティードニング』の書評者は、大人のためのハリー・ポッターにたとえつつ、『1Q84』を娯楽文学の傑作だとほめた。

一〇月の第一木曜日、スウェーデン・アカデミーがノーベル文学賞の受賞者を発表する日が近づくと、スウェーデンの新聞編集部は書評者に今年の予想を尋ねるのを常としている。質問はたいてい三つあり、だれが受賞すると考えるか、だれに取ってもらいたいか、だれに取ってもらいたくないか、この三問である。『1Q84』以前は多くの批評家は村上を取ってもらいたいリストに挙げていたが、今は取ってもらいたくないリストに挙げることのほうが多い。特に女性批評家は男性批評家よりも批判がちのように見える。どういふ言が最近現れているかを示すために、スウェーデン最大新聞『アフトンブラデット』の書評者のコメントを少し引いてみたい。二〇一六年の賞に関して、一〇月一二日号には（この年にはふだんより一週間遅れて受賞者が発表された）、一四人中四人の書評者が村上を取ってもらいたくないリストに入れ、だれ一人取ってもらいたくないリストに入れなかった。手短に理由を添えている。「村上文学は軽い夢、美しいけど束の間」、「村上はある神秘的な理由で、下馬評で最低のオッズしか取れない」、「村上文学はゴールまで達成しない、一歩前で止まる」、「村上は良い小説を書くが、あいにくかなり素朴な性差別にどっぷりつかっている」。この最後のコメントに見るように、多くの批評家は村上の女性描写（おっぱいの形の描写をも含めて）が性差別のステレオタイプに陥っている点を問題にしている。

それではいざ村上は賞を取るのだろうか。なるほど多くの評論家は村上文学に背を向けた

かもしれないが、そんなことはスウェーデン・アカデミーと関係のないこと。スウェーデン・アカデミーについて皆さんがどう考えようとひとつ確実なことは、その会員がまったく大衆や批評家の意見から離れているということだ。彼らはトレンドや一般の意見をまったく気にせず、ただ自分の文学的な歩幅にしたがうということだ。それでもやはり、村上は受賞しないだろうと私自身は予測している。ストックホルム大学でアカデミーの二、三の会員を教師に持ったことから、彼らの文学趣味について私は一定の見識を持っていると信じている。私には、アカデミーの会員のうちの古老世代は今や八〇代、九〇代となり、モダニズム全盛の偉大な伝統の文学に浸って育てられてきたようにみえる（アカデミーは歴史的にモダニズムに肩入れしてきたが、受賞者リストには時にはまったくといってよいほど奇妙な選択があった。たとえば一体どうしてフランツ・カフカ、ジェームズ・ジョイス、ヴァーヅニア・ウルフは外れ、パール・バック、ウィンストン・チャーチルが入ったのか）。アカデミーの影響力ある重鎮であるシエル・エスマルクは最近、一九四九年、いまだ世界の舞台で認められていなかったウィリアム・フォークナーの受賞は今までのアカデミー最良の選択だと指摘した。この意味で大衆文学者の側面を持つ村上が受賞したなら、驚きの選択となるだろう。反対にアカデミーの若い世代は、最近の文学トレンドを代表する村上タイプのポストモダン小説に一筋縄とはいわないがどちらかというともっと好意的であるかもしれない。

間違はなく、賞はたいいてい「難しい」作者に行く。大江健三郎が一九九四年に受賞したとき、私の日本文学の先生だった濱川勝彦はこんな笑い話を教えてくれた。受賞発表の後には日ごろの挨拶が「天気がいいですね」の代わりにしばらく「大江健三郎は難しいですね」というのだ。言いたいことは、もし村上が受賞しても「村上春樹は難しいですね」という文

句を誰も思いつかないだろうということだ。私の考えでは、村上はすばらしい語り部で大衆小説のユニークな作家だが、大衆小説はたいしてスウェーデン・アカデミーの標的ではない。二、三のスウェーデンの新聞雑誌記事で述べたことだが、もしも村上がアメリカ人がイギリス人の作家であったならば、賞の候補に推薦されているかどうかは疑わしい。思うに西洋における批評家による彼の評価には「オリエンタリズム」の要素が絡んでいる。確かに川端康成を選ぶにあたっても別の意味でだが、同じ要素は絡んでいたと思う。この要素のために、村上小説はただ純粹な大衆小説とは違う何かと受け取られている。村上は多くの小説の中で、二つの平行宇宙を対比させる型という、彼のファンに非常に魅力的な文学図式でヒットを放った。「オリエンタリズム」的な読み方―暗示を含み計り知れぬアジアの神秘―とびたりと合わせるように、平行宇宙を並べる好みは形而上学的か哲学的な深さを後ろに隠しているかのように読まれている。私見によれば、もしこれがたとえばアメリカの白人作家だったならば、純粹に大衆小説と読まれた可能性が高い。この言い方はやや裏切り含みで、たぶん陰謀理論に引っかかるように見えるかもしれないが、一片の真理を含んでいると信じる。

もちろんこれは完全に私だけの独創的見解というわけではない。たとえばマサオ・ミヨシはやや似たことを『オフ・センター』で議論している。彼は三島由紀夫と村上を比べて二人の文学が西洋の想像力にとつての日本をパッケージしているという。「二人とも海外の顧客のために商品を特別制作している。三島はエキゾチックな日本、その国粹的な側面を陳列している。村上もまたエキゾチックな日本、その国際版を見せびらかしている。しかしどちらも日本観に心を砕いている。もっと正しくいうなら、海外の買い手が望むと想像する日本に心を砕いている」(二三四頁)。付け加えるなら、私は村上が三島ほど露骨には西洋をターゲットとしていな

いと考えている。あるいは、もしかしたら全然西洋のマーケットを視野に入れていないかもしれない。それにしても、西洋ではまぎれもなく特定の村上小説の読み方があるように思う。

最近、ここ京都にて日文研フォーラムで話す機会を得た。それは大隈良典がノーベル生理学・医学賞を受賞した日の翌日にあたった。一種の前置きとして聴衆に受賞のお祝いを述べ、数日中にもっと日本人受賞者がいるかもしれないと述べた。しかしスウェーデン市民として、村上に文学賞が行くことを応援しませんがともわざわざ述べた。聴衆アンケートには次の興味深い回答があった。「村上春樹のノーベル賞授与反対と言われたことが理解できません。文学作品は、ノーベル賞で価値が左右されるものでありません。私は、彼の大ファンですがノーベル賞を受賞して欲しくありません。彼を批判することで、何かをなしたとする文化人の多い事をおきたい。もし仮に村上春樹が受賞しても私は彼をもう一度批判することで、何かをなしたとは思いません。その時にはじっと黙っているでしょう。」

(シドニー大学言語文化学部日本文学シニア講師)

原文・英語

翻訳・細川周平 (国際日本文化研究センター教授)